

研究拠点の構想

青山学院大学コミュニティ人間科学部は、全国の何ヶ所かに研究の拠点を設置するという構想を持っている。これは、学部設置の準備段階からの構想であって、教員・学生・想定される大学院生が、相模原キャンパスのみならず、その研究拠点において継続的な研究活動を行うという発想に基づくものである。もちろん、この研究活動は、拠点が置かれる自治体等との連携のもと、さまざまな支援を受けて始めて成り立つものである。

学部の科目として、「地域実習」というものを配置している。学部の「目玉科目」になっているようで、学生の関心も大きい。しかし、「地域実習」は、いわば受け身の事業であって、当該実習先のご厚意により、一方的にお世話になるようなものである。この「地域実習」をきっかけにしながら、継続的な関係を持ち、当該地域への何らかの貢献を考えつつ、実践的な研究を行う場として研究拠点は構想されている。

学部開設の広報をマスメディアを通じて開始して以来、いくつかの地域等から、なんらかの連携ができないかという、ありがたい声をかけていただいている。何の実績もない状況でのお声がけには、感謝するものの、体制が整わない中で積極的に連携をお願いするというのも、不誠実の謗りを免れ得ないので、慎重に対応させてもらっている段階である。すでに2年間の経過、「地域実習」も動き出す。この段階で研究拠点構想を具体的に動かしていくことが求められるのであるが、このかんにも、研究拠点形成に向けた動きとして位置づけることもできる企画も実施されてきた。この紀要では、それについての簡単な報告が掲載されている。

弘前学院大学は、三木義一前学長の時代に、大学間の連携協定を締結し、交流を開始したが、その一環として、先方がシンポジウムを開催し、3名の教員が参加した。大分県日田市は、このかん学部長が個人的に交流関係を持っており、研究拠点としての発展を目指す形で、教員4名で訪問して情報の収集に努めた。いずれも、新型コロナウイルスの感染が蔓延する前のことであり、その後に情報収集を予定していた自治体への訪問は、取りやめとなっており、連携の動きは止まっているところである。

なお、想定される研究拠点の構想は、全国の数カ所の自治体に拠点となるスペースを設置（借用）し、教員や学生・院生が一定期間滞在し連携した研究を行い、その地域に特化した研究成果を期待するものである。また、地域実習についても支援をお願いし、学生と当該自治体・地域との交流の拠点としての期待もしているところである。学部としての正式な決定はないが、この種の事業は、それを待たずに構想が進められることがないと達成できないことであろう。今後とも、研究拠点を学部内の制度に位置づけて活動を展開させるとともに、随時さまざまな地域と連携した動きを作り出せるといい。

コミュニティ人間科学部長 鈴木 眞 理